教草女房形氣

山東京山著

巻十
十三

へ 13
3580
13

門號 へ13 3580 卷 13

森先生著

洋算學そめ

一名早合點　全壹冊

此書ハ西洋算術の端として數字記号九々合數より加減乘除に至るまで各その用法を懇に示し次に問題各種を擧げ別に其答式を附録となし頗る深切にして手をとりて敎ゆるが如し實に洋算入門の書なり

早稻田大學圖書館 35. 1 22 購入 藏書

教女房形氣十三編

嘉永四亥秋稿成　同七寅初春發市　京山老人作

有先生予に謂て老人が作りたる女房形氣の稗史をよむに町家の妻を教導する意味ありて世教の万一ともなるべし凡人は無稽の戯筆に勝ることなし抑も夫婦は人倫の大道陰陽に位して一家の小天地也されバ古語にも天夫地妻といへり夫の陽氣妻の陰地を照して家督の一子を生む天地和合すれバ五穀豊饒し夫婦睦ましければ家内安全なりむつましといふも色情の事にはあらず夫婦心を一にあはし夫は家業に怠ずよく物事正路を守り妻は婦道を失ずよく家中を斉ふかくてこそ夫婦睦ましといふべし然るに亭主愚昧にて身分量を志らず家業に出朝寝して遊樂に夜を深し女房

少智ありて亭主を凌ぎて
此鶏晨をつくる類において
小天地反転て
陰陽位を
失ひ蔵の
屋根に艸が
生るかゝる家
にも女房賢才ありて夫の
あやまりを諫め補佐して
秋の末に大晦日を量計バ燈
火に油をさすが如く家内暗夜とハならざるべし
いまそ人の妻たるハ才智ありて才智をかくし夫を
天としておのれ地に位し気質静にしてよく庖中を治め針ハ紗綾
ちりめんの袷をあはせるまでかうしてそのほか遊藝ハ妻となりてハ

○新婦小姑に手本のよみをしゆる

入用なけれどもまたへ揃よしきハ類十人並なれバ極上の
女房なりまたむさし野の千艸の中にもかゝる花
なれバ稀なる風になよく
心ある尾花ならし
世の人嫉をうくるもの
第一美ならずともよきものなり
額の似合ぬ馬鹿なる
ものハ共にて憫る人あり
たゞ気質と針とをえらぶべし
是中より下の町家をのみいふと
かの先生が論冝なれバ無益の
口繪よりハよくとてふくませり

嘉永六丑年
仲冬脱稿
八十五歳
京山

女房形氣十三編初段

二段　おへさハかまくら
ゆくゑかねのちの
やどやをもやらでくらへのうちをもと
下女七人
つかひさる
身ゆうにみえうかくのおそ
いまゝ山の中ゆうくが
村のかうりどうるの
ちうのつなどうにの
ふしどうの谷へおもむ
らそ六にゝかな
きぬ二ツくさのゆるに
二ツへくまちうふえが
其十月のさむそうにハ
小袖一ツこどうのをと
さるへふおまえくろ
ぬのてころゆう
みさらさのあらん
くみ一ふらまへ
うへまゐかつみを
たくのみのみ
そうらもつくべく
小袖一ツのえぶを
あさいめるいりうる
いんぐさと おめのみ
つけ七の一のくるひさるをまうく
おうにとろうへハうへのを
まうらし一くておうろうるゆ女房

㊂たのミけるあつさ
ざへこのおふあの
まちみさそうねとふへ
おうくからうさ
五十両とふ
くわ太さ作が
つまさき
山中で
十両の
かねを
人に
とら
㊂

おへさのきをきまえ
下女をよびしハ
かくうをさがしゆゑ
ものぞうちかみ
なうの谷川のうちを
こうへむつむく
さらさのを
ゆまへまうを
のみも家を
うちてうまかくそう
まておいんあうの谷川へと
かのうへもあまどさまが
みのちもまたがくけへ
あもとまじけがまり
の女をもころあまく
りえやみてよそかな
くへのみちそも来
来のをみるのこのごろへ
家もんたそうく八四五日
やえうへうねゝ舟もあまべ
ろ用さへまべそをあげ
さろかまくろへいつうさもかくる
せん来さ七ろ用のくわん
ろみ一谷へあちさるとた
ゆくゑのことのうらぐへ
来ちのおうへ五六両のへある
べーとさうのうへの半丁
なりうる太ら作が女房ゟ㊁

㊃ひまへ
ざる
ゆめ
まちへ
来れ
くだ
ろ用
こつめ
かね
来こ
ろる

三段
小まものや
占べゑ

かつらど一ッ目
くまゑもん
おへと

四段

むすめ
おせん
五段
山だし下女お竹

山ざ下女
お竹
五べゑつま
おろく
その二

つまかろく

小いと

夢

六段
七段
小糸母

京山老人作
國貞画

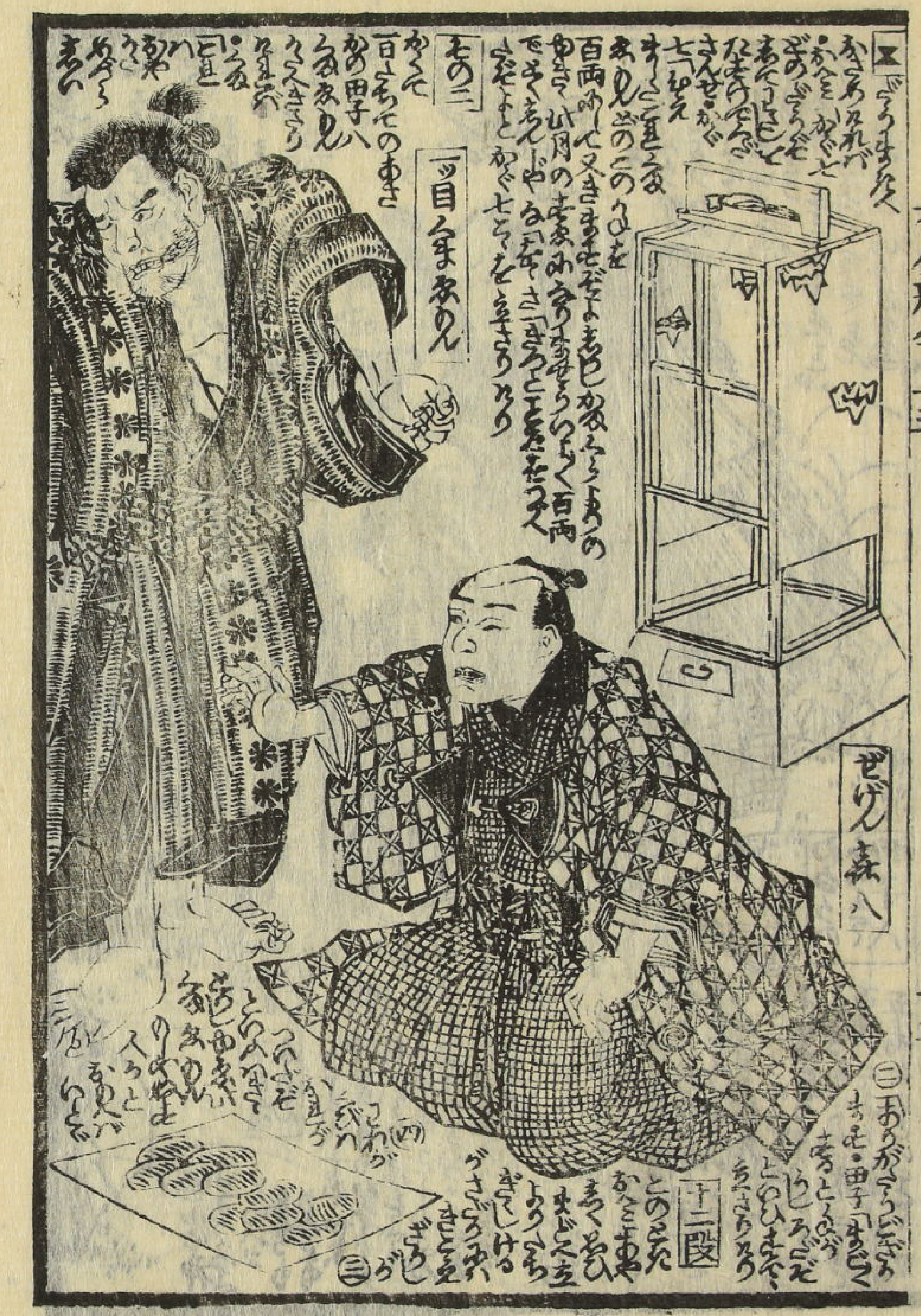
女房形氣十三編下の卷
八段

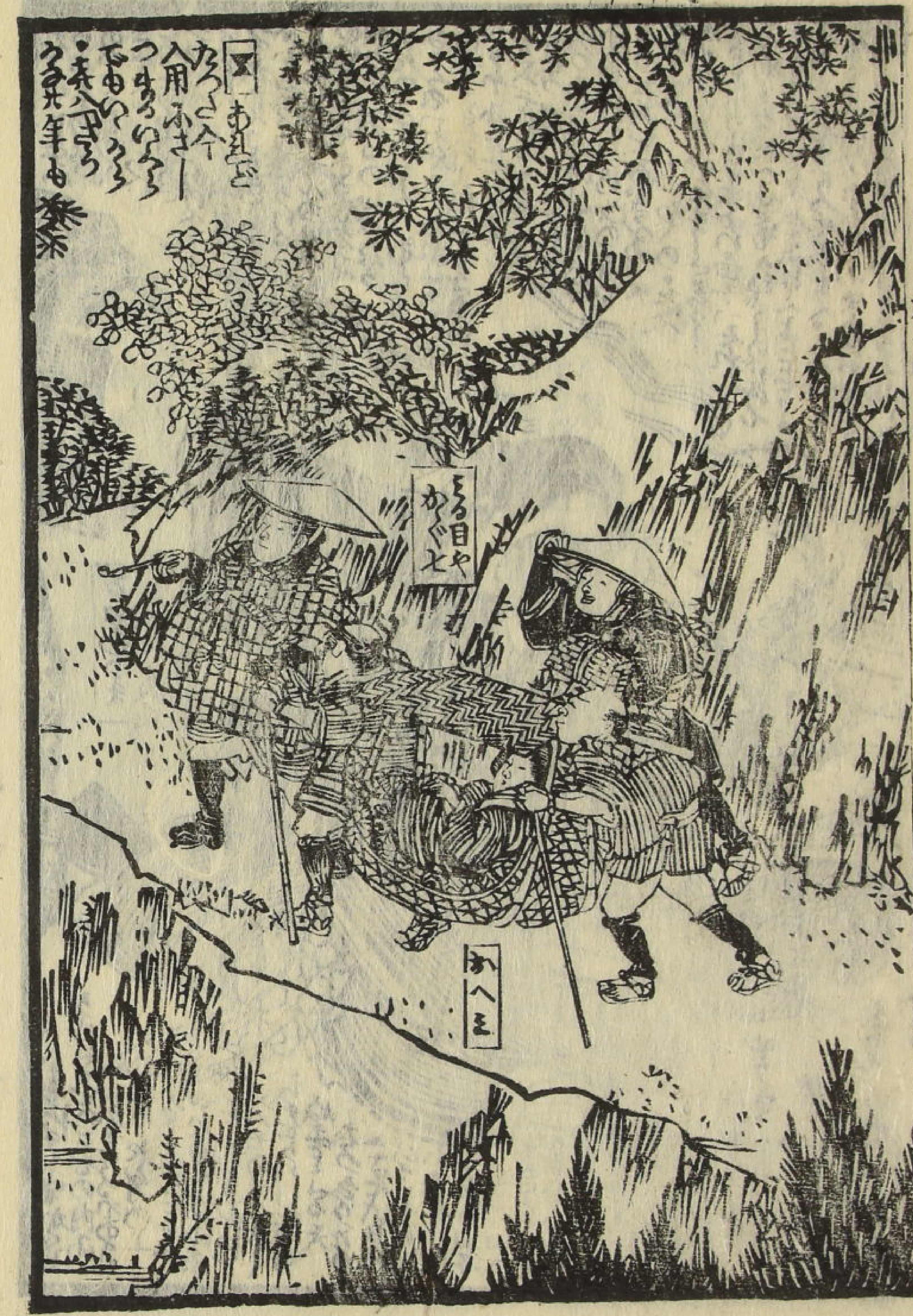
小糸
九段
小糸がうみたる万太郎

大當
谷山風
角力
千段
かく七かゝも

甲子八
まる目やかく七

十一段


ぜげん喜八
十二段


かご七

田子八浦

十五段

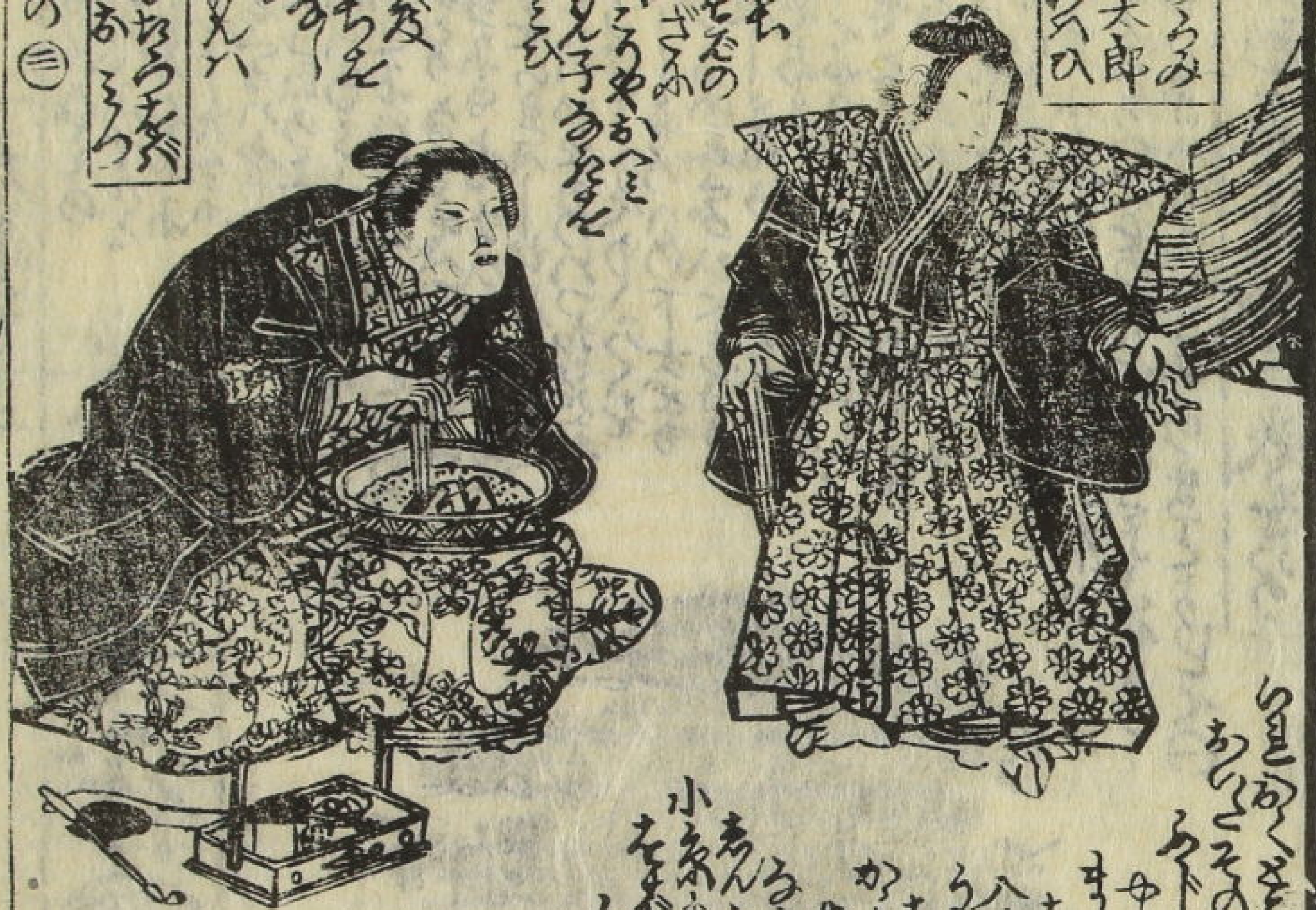
十四段
五人女つま
おろく

十六段
おひよの

あまんどきなと
だんなのおかみめりなり
かならずむすめのおくがり
めでたし・五人衆「このうち
あまたのおかみのおかへの
こゝろのおかへかへの
おもまぢもをきに
さかのおかこ入
あまざんこまとしずある
ありまもくちろ入ざきれ
ままぬ・おへ「こち
のの人へもあきさる
へもようぞこび
あそのむひぞや
おからそのうち
みそ「万ざ衆見ん ㊀

㊃つまをさがめ
ざるをよおひろと
あてあろみあそ
こゞすくつの人も
おなかのあるまの
目くらをつけ二百両を
「こしかのもちきたり」へ
かきのゝのふちち
あと万ざゑもんへ
もとよりこの
のあとのゑそちが
みさ衆こゝのの
やすとかくの
もでくりかゝりてて
けんねのおすの「おさか
ござと用ひのうちへ
うろうこかへそれ
うちご衆五人衆
みうらめうらち
おどろくをまのきる
うまをかまのおるまを
ぬまのそのせそる
八寸のおかみの糸んを
さやのあきまの「このや
おてきみろの万ざゑ
へのひかこのおまへ
おてそもみくそおなと
きろそろくのんきまさせ

㊅のへの
うなをさる
ゆるかろ
きんぐの
たろう
さきさ
るらう
あんせん
うんゐゆ
のべるが
ぞとし
町人へ
きろう
かのあり
人への衆
人ぶゞんな
とりやそまの
ねかくのごとく
つかれ
あせんの
ござ
このうら
史記さゆも
のうかの
のちへるの
あきまとし
なりあるそ
なのそく身の



㊁人の
りびへ
こゝろが
まろし
みえへを
もちてたれ
のたるそのの
おころ上ざの
いそぎ「このおかへを
万ざ衆見子あそを
ぶけるかゝら
おちそる
小糸をも
ねさ三衣
まそらのちぞ
たくんと
さるをも
万ざ衆見八
ひとの
ぎらを
たくその ㊂

のもかくさろもそらく
おくさその身つきあり
かどゆかく万ざ衆見が
やうくのひさん
まゝおや又五人衆より
そちらへ一ト人のその
八寸のものもちてひとまの
うちへのみなり この
をもぐそのひ五人衆も
かくこうあるぞ
ゆ糸さえもそれ
るされくさとあらかん
あんうのさえ万ざ衆見ん
小糸もこゝろのようもよく
をあをそうやまひきく
人ゞもをまくがたろ
ひそかなりけるとぞ

十七段

おへかくる事や
まのをあのぞ
なまどものの
むきをとそのな
ニツのをくろく
下女下男を
つかひぐろそうの
ひんまよして
きるへなのようの ㊄

かんかんをあをまる
あざるのあう
せひさく
このあり
あのとのろ
をようこび
て身代の
子とあろ
ざるへの
こゝろ
くようの
るつあんぞへ
へりておあ
あさるの六月
のあや
うさし

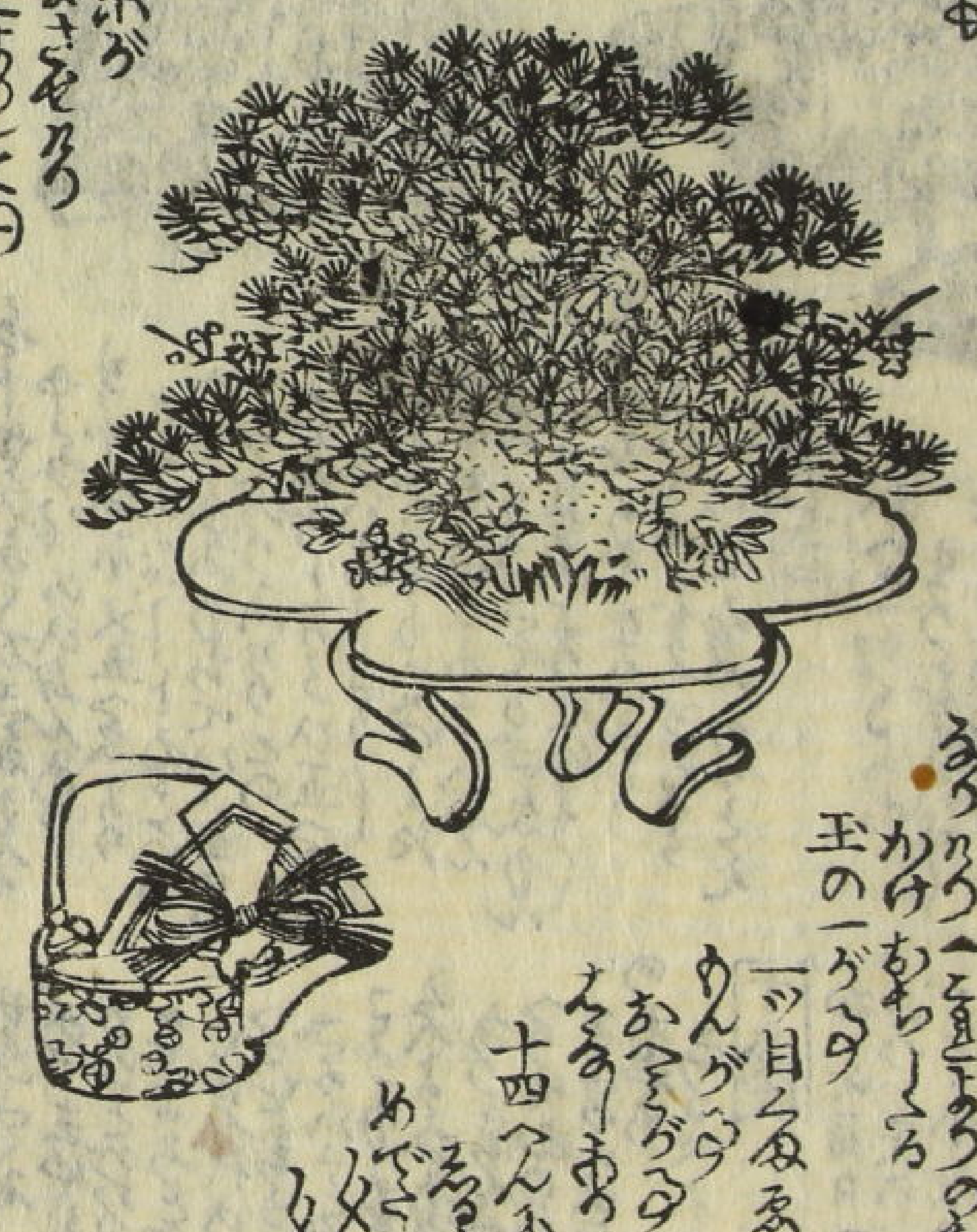
十八段

ある七月の
ころ八矢の
ごく小糸が
ふとろる
万そくそう
さうもかく
まくたま
みかう
なのこべ

京山老作

國貞画

せけんなみの
いろひゐぶおせんと
万ざ衣のんをおぶみ
さんぐんしろふ
さしづまでろへやさこぎぬの
のんつゐさぬの上下つとえぎし
さげりのめのおりしぶふやおべ一小ぎぬ
ろ見がかどゆへのまべしかえ羽おりの
そのわおぎりまうまえてひかえが
まぢうちふもおるまひのまうつて
ほれねんをいゝべーしだりんのいへ
ねーしふらいへひ衣のハつねなまる
一もんまうぎさこしてもへろくを
うらまべーしまそのめの下女ぎぬ
へをそ見つくふまてづひて杢をきを
をおまべーしまとくもえ衣を
このままもおまらがきかふうる
おうのめしてやるべーしえまさ小糸
こ見まろでこころふしく万衣ろを
そぐそてまんでへ衣をもつえぞげさる
おゑ万ろくそうそのこさそくしん
かさひおひろのやめべーしとをその
ざくまんもぞ小糸ふ なとまり小糸が
母へおちめへうちへ衣をつりていんきまさを石
こ見まる小糸のこころいろつのまでよりヒて㊀



㊁母みもらくえをこしをつかり
身わかるみあちのつゑと
まうろう一こ見とよりのもち
かけおもちしくる
玉の一ぐるり
一ツ目ふ女衣
めんぐるり
おへんぐるりふ
まうしあり
十四へんふ
えるまと
めでたし
〳〵

女房形氣十三編下巻おハり

ウエブストル氏 スペルリング獨學 一冊	サーゼント氏 第壹リードル獨學 一冊	宮田先生著 皇朝戰畧編 合本八冊	学校専用改点 小學素讀本 二冊	森先生著 洋算学[illegible]
日本書記 神代巻 片仮名付 小本二冊	加藤高文先生著 地方大概集 自初編至四編各五冊完	近藤先生著 金銀圖録 彩色入 全七冊	英學之部 横文字獨稽古 折本 壹冊	[illegible] 全一冊

藜光書肆 大阪心斎橋[illegible]

重談小説
楳史版全
荷水源熱